

スクミリンゴガイの被害と水田内での越冬状況

[研究のねらい]

スクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ）は、昭和60年に野生化が確認されて以来、発生地域が年々広がり問題となっています。そこで、貝密度とイネ被害との関係および水田土壌内での越冬状況を明らかにします。

[研究の成果]

- ①スクミリンゴガイは、田植え後の密度が1㎡あたり3頭以上になると収量に悪影響を及ぼします。
- ②水田に生息するスクミリンゴガイは、落水されると土中の比較的浅い部位に潜り込んで越冬し（図1）、翌年に湛水されるまで土中に潜んでいます。
- ③越冬率は、小貝（殻高5.1～10mm）と大貝（殻高25mm以上）では50%以下ですが、中貝（殻高10.1～25mm）では70～80%と高くなります。

[成果の活用面・留意点]

- ①休閑田では、厳寒期に2～3回耕起すると貝の密度が低下します。
- ②水口に約5mm目の網を張って貝の侵入を防ぎ、水田内では貝や卵塊の捕殺、薬剤防除などで密度低下を図ります。



写真1 スクミリンゴガイ



写真2 被害状況



写真3 スクミリンゴガイの卵塊

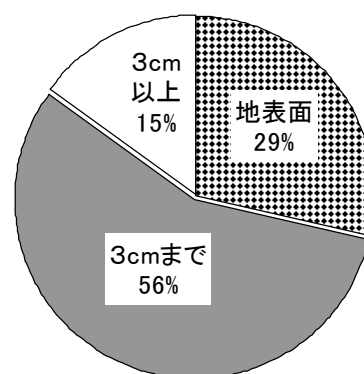


図1 越冬中の土中深度（水田）

実施年度：昭和61～平成2年

担当者：矢野貞彦、森下正彦、東 勝千代